

専門を貫く



音楽が与えてくれた出会い

高等学校芸術科・音楽を、教師として「いかに教えるか」については、これまで多くが語られ、実践されてきているが、未だにこれぞといわれるものが見当たらない。社会の急激な変化に対応しながら、教育のあるべき姿を考える時、芸術教育の必然性を感じるのは私だけではないであろう。多くの生徒たちと出会った三十八年間を振り返り、これからの自分の励みとしたい。

「何だ、お前か。サボッたら怒鳴るぞ。」新任校の校長は高校時代の恩師で、一瞬驚いたが温かい励ましの言葉でもあった。学校は環境が良く、先生方は気概に満ちていて、生徒が素直で生き生きと生活する姿を見ると、すぐに学校が大好きになった。教師としての第一歩を、このような中で踏み出すことができたのはありがたかった。

茂木高校での四年間は、全てが手探りであった。新採研修での指導案が手元にあるが、どのように授業を展開したのか思い出せない。校歌の伴奏も苦労した。前奏が無かったの、一斉に歌わせるのに途惑い、最後のフレーズを前に置いて前奏にした記憶がある。部活動は合唱・吹奏楽部を指導した。今思うと、どちらも満足できるものではなかった。ただ、生徒は無心でついてきてくれた。両方の部から教師を志す者が出て、担任と共に初めての進路指導を行ったが、改めてその重大さを思い知らされた。二人は今、音楽教師として勤めている。指導力不足をどうカバーするかは、大いに悩むところであったが、まずは生徒との信頼関係を築くことと考え、自分の持てるものを全てをぶつけた。小中学校の先生方からも、地区の音楽祭等を通して、多くのことを学ぶことができた。

生徒との接し方を教えられ、部活動指導の基礎的なことを身につけて、今市高校での勤務が始まった。それは思い描いていたものとは違い、新しいスタート地点に立たされたようであった。『所変われば：』であり、『郷に入りては：』の心境である。新しい集団にどう入っていけば良いのか、生徒にとって魅力ある教師とは。生徒たちの要求に応えるべく、それまで以上に自己研鑽を積み、前任の先生が築き上げた音楽のレベルを何とか維持しようと、生徒と共に長い時間を費やしたものである。今思うと長いようで短く感じられる十四年間であった。音楽への道を勧めたことは無いが、十余名の卒業生が、音楽の教師として頑張っている姿を見ると、在学中に何らかの影響を与えたものと思う。

宇都宮女子高校に異動すると、別の分野での力が必要になった。オーケストラ部の指導である。同じ音楽でありながら、いざ指導となると、それまでに得たものでは対処できないところがあり、必死になって勉強した。音大進学希望者の授業、毎年暮れに行われる『第九演奏会』の準備、二〇〇名近い合唱とオーケストラ部の指導、どれも生徒にとっては大切なものであり、手抜きなど許されるものではなかった。十四年間、最後まで持ちこたえてくれた自分の体に感謝したい。

宇都宮東高校での六年間は、校歌をしつかり歌わせた。少しだけゆとりをもって接することができた。校歌を大きな声で歌うことが、学校を勢いづけると信じている。新任校では校歌の指導に苦労したが、どの学校でもしつかり歌わせたと自負している。音楽の不思議な力は、子どもたちの心を豊かにし、ひいては、人間としての在り方を教えてくれるものと思うのである。

振り返れば反省することばかり

いろいろと指導をいただいた先輩や同僚の先生方に支えられ無事定年を迎えることができました。多くの生徒たちとの出会いには特に感謝しています。

教員としての仕事を総括すると、部活動と教科の指導に集約されます。野球部の顧問として小山高校で野球を十年間やれたことは、貴重な経験でした。途中で商業科の学科再編が、国際会計科の設立準備のために野球部の顧問を辞めなければならなかったことは、今でもとても残念に想い出されます。その後、卒業生が、オリンピックで金メダルを獲得したり、プロ野球界で活躍し、十分に楽しんでいました。

また、国際会計科での教科指導や学科の運営でも、何物にも代え難い充実感を味わうことができました。徹底した学習指導を中心とする学科の特色づくりが、保護者や地域の方々から評価を受け、商業学科からは不可能と言われた難関大学への進学も定着させることができました。英語と国語は、本県の有名進学校に負けない実力を定着できたことは奇跡的なことでした。専門科目の簿記や会計の学習では、大学卒業レベルといわれる日本商工会議所の簿記検定一級に、九名の生徒が合格してくれました。その反面、英文会計の導入には苦勞をしました。今でこそ会計基準の国際化が図られています。二十年前にはその重要性をなかなか理解されない状況がありました。日米の仕入原価の計算ひとつとっても会計処理が異なり、ダンピング違反の「おとり捜査」に利用されていた時代です。大企業の営業マンが逮捕された事件は、会計を指導する者として大きなショックを受けました。生徒たちが社会に出て活躍するのは二十年後ぐらいからです。教育内容が時代の後追いに

ならないよう、未来の社会が何を求めるかを常に考えていなければなりません。

社会の要請は、小さな事実よりも最大公約的なものに傾きます。少子高齢化と高学歴社会への対応としては、専門性を探求する専門学科よりも大学進学のための普通科へと学科編成が行われ、小山高校の商業科および国際会計科は平成九年度で幕を閉じました。グローバルizmの下で社会のニーズはますます多様化が進みます。やがて専門教育の見直しの時代がくると信じています。単一の学習内容ではとても対応できないからです。総合学科の誕生はまさに多様化への対応の一步ですが、とても十分とは思えません。

定年までの十年間は、宇都宮商業高校で働くことができました。教職員の取り組みと生徒の頑張りで、平成十八年度に、全商協会主催の検定で、三種目以上の一級合格者(一七四名)が全国一になりました。日商簿記の一級合格者六名の学習姿勢は今でも忘れません。簿記部の生徒たちが全国準優勝に輝く姿もしっかりと見ることができました。

教職の二十年は、簿記の高度資格の取得を中心に指導をしてきました。日商簿記一級の難解な学習内容は、強い学習意欲をもって挑んでも容易なものではありません。複雑で高度な内容に、何度も限界を感じながらも頑張っている生徒の姿はとも美しいものです。

人はそれぞれ能力に違いがあります。しかし限界に挑戦して乗り越えたときに得られるよるこびは一緒です。学習することがより大きな人間性の成長に結びつくように指導したいと考えながら、何もできなかったことを深く反省しています。

教員生活を顧みて

私は専門が工業の土木でしたが、大学を卒業してすぐに教員になったために、実際の建設業界のことを経験せずに教員になってしまいました。したがって現場の具体的な話をできずに生徒たちに指導して参りました。私自身この「現場経験のなさ」を教員生活の中で如何に克服し、生徒たちに自信をもった指導ができるかが大きな問題でした。

幸い最初に赴任した真岡工業高校では、仕えた土木科長が現場経験をされた方で、現場のやり方を取り入れた指導をされておりました。私も生徒と一緒に必死に学ぼうと生徒たちと競争しながら土木実習をしていたことを思い出します。また、土木製図は単に図面を写図させているだけでは実際の土木構造物の理解はできないだろうと、土木科で図面に沿った模型を製作しました。実習室の片隅に科職員がそれぞれの休み時間に分担箇所を作つていき、自分が遅いと放課後残つて作つたりと職員同士も張り合いながら模型を作製したことを覚えています。おもしろいもので実習室に出来上がった模型が次々に陳列されていくと、私たちも達成感を味わいそれがまた次の模型製作に挑戦するということになりました。今はコンピュータで3次元CADを使い簡単に構造物を見せたりできるようになり、製図の指導も楽になってきていると思います。当時、学校の職員構成は若い人たちが多く、部活動の指導の後や独身会などでよく飲んだりしました。宿直があつた時代で、先輩教員と泊まつたりしたときに、苦労話や有益な話をしてくれられたことが勉強になりました。今思ひ出すとそれぞれが楽しく学べた暗黙の新米教員への研修だった気がします。

その後、県北の那須工業高校（現在の那須清峰高校）に転勤になりました。私自身、同

じ工業高校だからそんなに変わらないだろうと思つて転勤しましたが、芳賀郡と那須郡の地域性の違いや教育課程の違いによる学校の違いなどを転勤して初めて経験しました。「異動は最大の研修である。」と言ひならわされていることが本当だと知つた時でした。那須工業高校には二十二年間お世話になりました。その間、学科再編により商業科が増設され、土木科も建設工学科に再編されて校名が那須清峰高校になりました。その時に実習棟改築がありました。古い実習棟からプレハブの実習棟への移動、続いて新実習棟完成後にまた移動と、科の先生方や生徒たちと協力し合いました。校長指導のもとに各科の先生方と連携しながら実習棟改築に携わることができたことは私のよい思い出となりました。

その後、真岡工業高校、栃木工業高校と転勤し、教員生活最後の四年間を足利工業高校で過ごしました。足利工業高校では創立百十周年記念事業に携わることができました。教職員はじめ、同窓会「栃工会」、PTAの皆様のお陰で記念事業も無事行うことができました。その時姉妹校締結したドイツの実業高等学校に生徒と訪問してきました。ドイツの工業技術の高さは、「マイスター」の固らしく、基礎からしっかりとした工業技術の指導が支えていることを知りました。また、熱心な指導は日本だけではないということを知り、これからの日本の工業の発展に、先生方の役割は大切であると思ひました。足利工業高校でも、多くの方々が大変お世話になり教員生活の最後を送ることができました。

最後に、私が先輩から生徒に向かうときの心構えを教えて貰つた、山本五十六の言葉「やつてみせ 言つて聞かせて させて見せ ほめてやらねば 人は動かじ」を皆様にお送りしたいと思ひます。

家庭の教育力を高めるために

長い教員生活で親子を教えた時、子どもは「先生は、私のお母さんを知っているんですね。お母さんの高校時代はどうでしたか。」と自分の母親が自慢している事を確かめるように質問し、お母さんの方は「私の子は、とてもいい子なんですよ。よろしくお願ひします。」と誇らしそうに話すとき、一人の家庭科教師として、私はとても嬉しく教師冥利を実感した。

家庭科教育には、自己表現を図って生き生きとした人生を送り、家庭・家族の機能を生かすとともに情報を適切に活用して生活を創造する力を養い、国際社会に生きる心豊かな人間として生活していく基礎基本を身に付けることが求められている。すなわち未来の家庭建設者として生活の自立能力・経済的自立能力・精神的自立能力(心の安定)・コミュニケーション能力の育成が必要である。この目標を達成するために、知識・技術の習得は言うまでもないが、特に習得した事を実践しようとする態度・意識の高揚を図ることが大切である。そのためにはどうしたら良いか、また学んだことを生涯にわたって生きた力にするためにはどうしたらよいか思索しながら教えてきた。心に響く家庭科教育を目指した。一つめとして、人間にとって家族・家庭生活の大切さ・在り方・親の在り方を自覚し、家族・家庭の人への感謝の気持ちを持つように意識して指導することが大切である。祖父母・両親・兄弟姉妹の感謝はもとより、今まで関わりがあった人、支えてくれた人、お世話になった人達に感謝する気持ちを持つことを教えた。「ありがとう」「お世話になりました」という感謝の気持ちを持つことにより、高校生の多感な時期に親とのコミュニケーション

ョンを持つことになり、一段と精神的に成長していくことを確信している。

二つめとして、心豊かな人間を育てるために、家庭科では体験学習を通して感動する心や自他を愛し、共感することのできる心を育成し、自尊感情を育む事ができる。さらに実験・実習等のグループ学習をとおして協調性やコミュニケーション能力を育てることがができる。生徒が体験活動や実験・実習で感動体験をするために緻密な計画をたて、過程で失敗することがあっても成功体験を味わうことができるように工夫することが大切である。保育実習では、子どもと接するのが楽しいと感じるとともに、自分がかげがえのない存在であることを実感した生徒が多い。家事手伝いでは「年末の大掃除を家族みんなで、できたことがとても良かった。家族のコミュニケーションがとれ、家族の素晴らしさを再認識できた。」の感想があった。感動することは、今後の活動への意欲に通じ、自尊感情を抱き、目標達成の原動力となった。

さらに習得した家庭科の知識・技術を自分の生活の中で実践するために、創造・愛情・奉仕・勤労の精神を養うことが大切である。その基本になっているのが規範意識の確立とその実践である。例えば、挨拶ができる・親切である・返事ができる・他の人に尽くす・掃除をきちんとする・正しい姿勢であるなどを身に付けさせておく必要がある。

教師は学校では親の存在であるので、生徒の良いところを引き出そうと、誠心誠意接し、最善の努力をして、生徒の指導に当たることが大切である。生徒が自信をもち、二十一世紀を担う、かけがえのない一人の人間として自立し、立派な親になることを期待する。

「生きる力」をはぐくむプロジェクト活動

「生きる力」とは、「自ら考え、学び、行動する」「共に協調し、豊かに生きる」「たくましく生きる」などとされている。そこで「生きる力」をはぐくむ農業教育の役割は、意欲的に学び、基礎・基本を確実に習得し、自己教育力を育成し、資質の向上に努めるなどとされている。ところで、プロジェクト学習法は、自ら課題を選定し、計画を立て自ら実施し、その学習内容の結果を自ら反省・評価するという四段階を踏む学習法であり、「生きる力」をはぐくむ良い手法である。

この活動を通して問題のとらえ方や解決方法などについて学習し、理論的、科学的な考え方に立つて見つめ、想像力を身につけることができる。いわゆる普通高校での知識や効率だけの評価中心のカリキュラムに加え、価値観以外の想像力、探求心の向上に、大いに近づくことができると思われる。そして、この課題は農業教育の主たる答申課題になっているが、農業教育の現場では多くの問題点をかかえているのが現状である。一年次の「農業科学基礎」二年次学科の中核となる専門科目、そして三年次「課題研究」「総合実習」へと段階的、継続的にプロジェクト学習に取り組ませる。特に三年次の課題研究は自ら課題を設定させ、自主的な活動に基づき取り組ませれば、生徒自らの自主性を育て、意欲的に農業学習に目を向けさせることができる。その結果、より多くの問題を解決する資質や能力が高まり、生徒一人ひとりに自信が生まれ充実した学習活動が推進される。

農業科学基礎の教材研究は、プロジェクト学習の意義や生徒の興味関心を抱かせるための重要なポイントである。ダイコン、ハクサイなど、一年生だから簡単に失敗しないもの

が教材として導入される。これは体験学習を主にした観察的な学習手法である。しかし近年、小・中学校では総合実習の授業で、スイカ、ミニトマトなどの教材を取り入れ、素材や観察記録も高いレベルで行われているため、一年次の教材は、「高級ネットメロン」「養液栽培」などの従来の三年生の専攻学習で取り入れられた、「高度」「先端技術」などの教材を導入した。さらに「農業系学科」に入學して、中学時代の学習とは「何かが変わった。」「こんなものが自分に来るのか」などと問いかけて、「その結果自ら育てたものが出来た。」「何となく農業っていいな。」「普通教科より楽しい」などと、農業学習の良さを教え、生徒一人ひとりに中学時代に描いていた農高のイメージをチェンジさせる「大切な第一歩の授業」にすることができると思う。こうして農業科学基礎は農業科目を展開する入口としてもう一度見直し、「地域の特産品」や「達成感を抱かせる物作り」などを取り上げ、創意工夫する必要がある。

当地域は、「首都圏農業」の中心としてイチゴなどの園芸産地が形成され、生産性向上を目指した施策が展開されている。その中で農業高校と地域農家との連携は大変重要である。そこで地域農業の抱える問題点を学校に持ち寄り、農家と共に創意と工夫を活かした研究活動を進め、地域に開かれた学校づくりに貢献している。そして、研究成果は農業クラブプロジェクト発表会、論文コンクールなどに参加させ、多くの賞を受賞することができ、生徒たちの自信と誇りにつながっている。

特別支援教育の世界にはいろいろな〇法がある。私も三十八年間の教員生活の中でたくさん〇法に出会ったが、ほとんどは自分に納得できることを取り入れるというやり方で素通りしていった。しかし、中には、ずっと私の教員生活を支えるものとなった方法や考え方ができる、かなり普遍的なものを含んでいた。その普遍性は、人としての心や体の発達が基礎にあり、生理学・神経学的な観点で納得のいくもので、一般の幼保、小中学校、高等学校にも当てはまるものではないかと実感させられた。その中でも次の考え方、子どもの見方はごく当たり前のようなことであるが、つい見落としがちなことであると思う。

①人は心(認識)と体(実体)をもち、その両方で成り立つこと、及び心と体の関係。人は外界からの刺激を耳や目、皮膚等体を通して取り入れて心を形成していく。心は体を通してしかつくりられないものである。またその心は体を通してしか表現されない。従って子どもの心を理解しようとするときには、体の各器官を通して理解することになる。私たちはどうしても表現体としての子どもの体(姿勢や体の動き、口を通して出る言葉等)そのものに左右されることが多い。しかし、大切なのは実際に子どもに何がイメージされ、描かれているのか、その心を見ることである。それは子どもに働きかける際にも言うことで、自分たちの働きかけにより子どもの心に何が描かれるのかを常に留意しなければならぬ。意外だったのは、子どもに体の動きを教える場合は、ただ手取り足取り教えるのではなく、子どもの心に子ども自身が動いている体の感じを描かせることができたか

決め手になることであつた。動かされたときに子どもがどう感じるか、実際に子どもになつて動かしてもらうと心に描かれる動きのイメージが大きく違ってくる。これには目からうろこが落ちた感じがした。わずかな働きかけ方の違いで、子どもが自分で動かしたとイメージできるような支援ができるのである。人はこのような心と体をもつ。このことを基本として理解しておきたい。

②人は生物体として的一般性と一人ひとり違った生活の中で形成される生活体としての個別性の両方もち、その両方からバランスよくとらえていくことが大切であること。障害に応じた適切な教育やそれぞれの個性を尊重した教育が重視されることは大切であるが、それだけでなく、どんなに特殊な事情がある子どもでも、人としての教育が重要になる。一般的な社会の中でのルールや人としての在り方と、その子に応じた一人ひとりの特殊性や個性の両面をいつも意識したアプローチが大切になってくる。

③動くこと・活動することだけでなく上手に休むことも一緒に教えたいこと。よりよく動ける子どもはよりよく休むことができる。うまく活動できない子どもの中には睡眠も含めて、うまく休めない子どもが多い。とかく動くこと・活動することに目が向きがちであるが、上手な休み方も視野に入れていく必要がある。このことは、特に現代の一般社会人にも通じることで、最近よく見かけるようになった休むためのいろいろなグッズの中にも、十人以上前から特別支援教育の中で考案された物が多いように思う。

これらは普遍性といっても、ごく当たり前のことの一部である。こうした当たり前のことを見直すことで、本当に大切なことが見えてくることがあると感じている。

私が取り組んできたことを振り返って

私の専門は電気工学である。大学で教職を学んでいる間に、工業技術を生徒に教えたいという気持ちになり教員になった。初任者として勤務したのは、N養護学校であった。工業科の教員として、この学校で何ができるんだらうという不安なスタートであった。高等部に所属し、「数学」を担当した。大学時代に数学教育にも興味を持っていったことが幸いであった。障害のある生徒たちとの出会いであったが、理解力の高い生徒もおり、高校の教育内容を授業で展開することができた。また新しい教育内容である行列やベクトルのテキストを独自に作成し、指導することにも取り組むことができた。初めての卒業式は、涙の別れであった。二年目には、自ら希望した重度障害児の算数教育に取り組んだ。そんな中で子どもたちが理解するとはどのようなかを知ることができ、その後の教員生活で大きな経験となった。今、振り返って見ると、教材を工夫したり、様々な教員や子どもたちと出会いを通して、貴重な経験ができたことが忘れられない思い出である。

その後U工業高校に異動し、工業教育に取り組むことになった。精密機械科への配属であったが、興味ある分野が沢山あった。当時導入されたばかりのNC工作機械や計測制御技術、そして空気圧制御の実験装置の製作などを通して、工業教育の楽しさを味わうことができた。また電気関係の授業も希望し、週二十八時間の授業に取り組んだ。五年目となり、専門の電気・電子科への配属となった。当時はミニコンが導入されており、その教育に興味を持った。先輩の高度な技術に出会い、自分もコンピュータシステム設計などの高度な技術を身に付けることができた。アセンブリ言語で円周率 π や自然対数の底 e の値の

計算をする経験もできた。まもなくマイコントレーニングキットが登場し、その教材の開発と教育実践は、忘れられないわくわくした思い出である。優秀な生徒のシステム開発力の高さに驚かされたこともあった。次にT工業高校の情報技術科へ異動し、パソコン用OSの時代(CP/M, MS-DOS等)の教育環境を開発する必要性を感じた。教育用マイコンボードの設計をし、一人一台のマイコン製作とOSを活用した教育に取り組んだ。事務員に相談し、ロムライターを購入できたことも幸運であった。マイコンはテキストと共に全県下の情報技術教育に利用され、初期のロボット教育へと発展してきた。また内留教員(計五名)の指導に取り組むこともできた。その後、S高の新設学科である情報制御科の立ち上げを担当し、それまで実践してきた技術教育を集大成した学科を設置するという大きな経験ができた。新設学科では、独自の教材の開発を多数行い、学科を発展させることができた。教育環境を整備することで、多くの生徒の教育や教員の研修を現場で行うことができた思っている。

以上、私がこれまで取り組んできたことを概観した。教員は、絶えず研究と修養に努める必要があるといわれる。また技術の発展もめざましく、絶えず次の時代へと教育内容の改善を図る必要がある。大切なことは、自分の研究した教育内容を同僚に公開し、さらに生徒の教育へと実践し、新たな問題点を発見し、改善を図るという繰り返しに取り組むことである。そのような中で教員としての充実感を味わうことができ、わくわくした教員生活を送ることができるものと思う。教師が現場で互いに協力・信頼し合い、絶えず学んでいることが新たな教育への意欲となり、学校の活性化が図れるのではないだろうか。

栃木県立栃木工業高等学校 角田 重雄

高校時代の思いを貫いて

私が音楽教師を志すことになったのは、高校時代の音楽の先生、清水先生との出会いからでした。中学時代に親の承諾が得られずに、一度あきらめていた音楽でしたが、清水先生との出会いが、私の心に火をつけたのでした。

清水先生が音楽について語る時、音楽がどんなに魅力的なものか、先生のお言葉や表情から溢れ出ていらつしやいました。高一の私は、音楽の限らない魅力に引き付けられ、親を説得し、この道突き進むことになったのです。この自分自身の体験が、私の音楽指導の基盤となりました。まず、自分自身が心から音楽を愛好している姿を生徒に伝えよう。決して派手ではありませんが、恩師から学ばせていただいた音楽教師の姿勢を、授業で貫いてきました。

一校に一人しかいない音楽教師は、大なり小なりの孤独を味わっていることと思います。私の赴任二校目では二十四年という長い在任期間でしたが、その中には極端な騒がしいクラスや、どうにも声を出さないクラスがあり、奮闘した時期は孤独を味わいました。

騒がしいクラスを持った時期は、学校内の問題行動が多く、落ち着きのない生徒が幅を利かせておりました。私には、厳しく恐さでねじ伏せるだけの力はなく苦勞しました。女性であることの限界も感じました。授業が終わると疲勞困憊するほど大声も出しました。若かった私には、これといった特効薬はありませんでしたが、心に誓っていたことがありました。それは、生徒に言ったことは必ず守るということでした。躰をしなければならぬいクラスに対し、脅しだけの実行できない言葉は言わず、「こういう場合はこのようにす

る」と、生徒に指導の約束を納得させておいて、それを必ず実行しました。また、大きい声で歌えば八十点あげると、生徒の意欲を誘いました。そして、八十点をクリアした生徒を、発表し誉めました。そして、叱った後も、心を切り替えて、「音楽って素敵でしょ」と誘い続けました。この経験は後に母校で生徒指導部長という、音楽と全く似合わない役を引き受けた時、とても役に立ちました。なんのために指導するのか常に生徒に納得させて指導しました。そして、音楽の授業には心を切り替え、音楽教師の姿を貫くことにより、役割を両立させることができました。

騒がしいクラス以上に悩んだのが、声を出さないクラスでした。授業は真面目で静か、しかし、どことなく自信がない。率先して声を出す生徒がいない。情熱があれば必ず通じると、奮奮しましたが、空しさだけが残りました。大きい声で歌えば八十点あげるという給も役には立ちませんでした。険悪なムードにしないと心に誓い、他のクラスより情熱を込めて指導しました。その頃始めた腹式呼吸の指導は有効な手立ての一つでした。息を吸いながら腹を膨らませ、息を吐きながら腹をへこませる。男子生徒にはできませんが、一人ひとりの生徒の腹に手を当てて指導しました。これは生徒にとって具体的な目標となり、生徒個人と接することができました。また、歌唱テスト時には、一人ひとりのいいところを極力誉め、その生徒にあったアドバイスをしました。この、個に働きかける根気強い指導により、先の灯りが見えてきたのです。

現在母校で、教師としてやり甲斐のある毎日に、幸せを感じながら過ごしています。

体験させたい「ドキドキ・ワクワク」

理科教育には研究活動を

初任校では卒業生を送り出すと他校視察に行けた。私は日本学生科学賞選集や東レ理学賞受賞作品集で巡り会った、大阪府立大和川高校の西川友成先生の授業を見学させて頂いた。先生は自習用教材と実験を基にした「デイスカッションスタイル」の授業をされていた。鋭い発問、活発なやりとり、生徒の鍛えられた観察力・発表力に私は圧倒されてしまったことを今でも鮮明に覚えている。

ガリ版刷りの教材を頂き、これを使用した授業を試みたが、西川先生の意図したことがうまく生徒に伝わるはずもなかった。教材は自分のことばで言い表せるまでに研究し尽くしたものでないかと心に残まれないと痛感した。そこで、毎年一テーマを決め、実験を主にした徹底的な教材研究をしようと決意し、着実に実践した。

部活指導の楽しさ

研究テーマの選定は生徒だけでは難しかった。そこで、身近な自然現象や教科書の内容について、疑問をやりとりする中からテーマを決めてきた。また、研究の過程で新たなテーマが見つかることも多かった。高校生には難しいと思われる内容でも、関連する理論や公式等を示すと柔軟な頭脳は思いもよらぬ理解力を発揮するもので、考える楽しさ、どきどき、わくわく感を一緒に体験できた。

研究発表は日本学生科学賞審査会と日本化学会春季年会に合わせた化学クラブ研究発表会で行ってきた。化学クラブ研究発表会では著名な先生方の前でのプレゼンテーション

や質疑応答、ポスターセッションなど学会と同様な体験をすることができた。その際に講評や研究の進め方についての学問的、技術的なアドバイスを大学の専門の先生から文書で頂いた。このような活動は科学の面白さを知り、目的意識をもって意欲的に勉強や研究に取り組む生徒・学生を大学と連携して育てていく一つの形として、今後より一層盛んになることを切望している。

情報の入手

化学関連の情報の多くは日本化学会化学教育部会の会誌「化学と教育」から得た。また、日本化学会では実験講習会・教育懇談会・化学実験講座等も開催しているので、積極的に参加した。そこで行われる研究者の講座・実験には毎回驚嘆することが多かった。

もう一つは、アメリカ化学会化学教育部会の「Journal of Chemical Education」誌の購読である。世界中から投稿があるため「これは明日の授業にすぐ使えるな」というような実験やヒントを多数得ることができた。また、本誌の過去の論文がインターネットを通じて全て閲覧できるため、自分の勉強や生徒の研究指導に大変役立った。

おわりに

生徒の理科離れに対し様々な対策が検討されているが、何よりも大切なことは毎日の授業や実験、課題研究や理科の部活動などを情熱をもって指導することである。そして、科学の面白さを多くの生徒に強く感じさせることだと思っている。

退職に思うこと

理科の実習助手として仕事に就いてから三十数年。昨年以來、「退職」という言葉も自分のものとして受け入れ、「立つ鳥後を濁さず」のたとえどおり、危険薬品の整理、設備、備品の管理、戸棚の整理と進めていた折り、この原稿の依頼でした。

私を最初に迎えてくれた学校は、普通科三クラス、農業科一クラス、家政科一クラスを含む一学年五クラスでした。仕事の内容は大体理解していたつもりでしたが、専門的なことも多く、自分の知識のなさを知りませんでした。化学の実験には常に危険が伴います。特に薬品は、特性を十分理解した上で使用しなければなりません。そのため危険が予想される実験は、先生方から実験の内容や方法など事細かに指導していただいで準備したことを思い出します。昭和四十九年、毒物劇物危険物取扱要領が定められ、毒物劇物危険物の在庫の確認、月別使用量を管理台帳に記載するようになり、安全管理のため毒劇物取扱責任者の資格を得ました。

実験授業がスムーズにできるように先生を補佐し職務に専念していく中で、生徒との関わり、薬品の保管管理、仕事の明確化など、幾つかの課題に直面しました。特に実験授業への関わりについては新任当時には戸惑うことも多く、先輩方のアドバイスを、研修会で指導主事の意見を伺い、職務に生かすように努めました。

さて、異動は最大の研修の場と言われますが、転勤した普通高校（八クラス）は、何人もの新規採用の先生を迎え、研究授業・実験授業の予備実験など、失敗したり成功して喜んだり、教科中心の仕事でした。若い先生方の新しい感覚を生かし、今までの経験を基

にして先生方をサポートすることができました。そしていつも先生方とコミュニケーションを取り、信頼関係のなかで仕事ができるように心がけました。そのために気づきやすいものも私たちに課せられたものであり、そうすることで先生方の考えや実験方法、実験授業への携わり方が見えてきます。実験授業の終わりの「お世話になりました。」「ご苦労様でした。」の会話は、その表れであり充実感・達成感を味わうことができました。

もう一つ大切なのは、生徒との関わり方ということです。ある日のことでしたが、学校で問題を起した生徒が隣室で指導を受けていました。昼食時、どんな様子かとお茶を入れて話しかけたことがあります。最初は口数も少なく無表情だったように思います。しかし何度か尋ねると少しずつ話をしたり表情も明るくなって、笑顔であいさつを交わすようになってきた頃、生徒指導部長から「お世話になりました。」の言葉でした。些細なことでしたが、生徒には何が必要で何が大切なのかを知らされた思いでした。先生方を側面からサポートすることで、違った立場で生徒と関わり、共に生徒の成長を見つめていく喜びがありました。

現在の高校では教科以外に部活動、教育相談、総合的な学習の時間と生徒に接する機会が多くなりました。茶道部では学校祭に向けて稽古に励んだり、高文連の交流会の担当校として責任を果たしたりと、生徒と力を合わせて一つのことを成し遂げた事で、喜びを分かち合うことができました。いろいろ身近に接していると、心のつながりもできて教えられることも沢山ありますが、生徒にとって大切なことは、自信を持つことでしょうか。今、部活動、総合学習を通し、日本の文化を伝える事で何かを見つけてほしいと願っています。

栃木県立矢板高等学校 渡邊 道子

・ おいたち

「小学校一年時欠席五十日ぐらいかな」

熱を出したり、風邪をひいたり、弱虫で泣き虫で体育嫌い・そんな私が体育教師に。

幼い頃「寒くないか」「あぶないよ」と心配性の母親がいつも私の行動に注意を与えていた。だから、私はいつも限界までの生き方はせず甘えの中で生活していたように思う。

しかし、中学校でバレーボール部に入部した。それは、母親からの脱皮でもあったのだろう。部は、いつも出ると負けであり、私は心の中で「勝つ喜びを味わいたい。」と思うようになりながらも、体を動かして汗することの快感を体得した。そして、もっと強い部活で活躍したいと思い、高校でバドミントン部の門をたたいた。そこは勝つための練習をしており、甘えや弱音は許されない場であった。しかし、このことが私をバドミントンの「とりこ」にしたのは事実であった。その結果、念願叶って、インターハイで優勝できた。それは以後の生活に大きなウエイトを示した。泣き虫で、体育嫌いだったし、勿論運動能力不足。だから「人より沢山集中した練習」をモットーに取り組んだ。

・ そして体育教師に

大学卒業後は教師しか選択の余地はなかった。大学入学後まもなく父親と死別、教職を継続することが両親への恩返しと、いつも胸に秘めての生活であったように思う。

初めての教壇は、真岡農業高校（現真岡北陵高校）であった。今では考えられないが、赴任一週間目にバドミントン部の合宿があった。そして二年目に関東大会で優勝できた。

嬉しくて熱いものがこみ上げてきた。当時その教示の方法はがむしやらであった。

七年後、芳賀高校に転勤、バドミントン部を作ったがなかなか環境も許されず、四苦八苦であった。そんな中、今までバドミントン競技ができたのは、協会の方々のお陰であり、その恩返しがしたく、バドミントン協会の事務局長として、裏方で協会を支えようと大きな決心をした。教師生活の最後は母校へ、私が汗を流した体育館の床の上で再び後輩と共に活動できる。これ以上の喜びはなかった。

後輩と共に十三年、インターハイや国体に出場するたび、彼女たちと抱き合い落とした涙は数知れない。「助け合って成る」「努力は嘘つかない」「頑張れ自分」「頑張る君は美しい」「いつかはきっと」「元気があれば何でもできる」「明日があるさ」等々これらのことばの裏には大きな決意や思い出や涙はつきものであり、一生懸命さは相手に通じることを経験した。

沢山の生徒と出会ったから、いや頑張る生徒がいたから教師生活に情熱を注ぐ事ができ、楽しい日々を過ごせたことに感謝している。生徒を信じ「いつかはきっと」の精神で汗したことに後悔はない。三月三十一日まで共に汗した部活動は、校務分掌の一つであるが、私にとって「与えたもの」「得たもの」は大きい。たかがバドミントンされどバドミントンではあるが。

退職した今、まだまだつながつている卒業生たちと楽しいバドミントンを通して、さらに大粒の涙を流すのも間近だろう。

「部活動は素晴らしい。」と力説するそんな教師がいてもよいのではないだろうか。

栃木県立真岡女子高等学校 大島 喜代 子

命が教えてくれる教育

私はこの春に農業教員としての三十八年を終了し、現在は大学生を相手に講義をしています。季節の移り変わりの中で改めて農業教育の素晴らしさを噛みしめております。振り返りますと、昭和四十五年に喜連川高校に赴任したのが昨日のこのようです。その頃を想いますと、己の未熟さに恥ずかしくなることも多々ありますが、親密な人間関係の中で様々な大切なことを学ばせていただいた貴重な時期でもありました。

特に三年先輩のS先生との出会いは大きなできごとでした。当時、S先生は私のクラスの副担任であり、農業科の畜産を担当し、陸上部の顧問をしていました。

毎朝六時半には農場に顔を出し、牛舎内を清掃し、一頭一頭の牛に声をかけ、頭を撫でたり餌を与えたりして牛達の状態をチェックし、その後には早朝登校の生徒たちと一緒に搾乳をする。これを徹底してやっております。牛舎は木造の粗末な施設でしたが牛達はいつも清潔で美しく見事なものでした。S先生は部活動にも意欲的に取り組んでいました。時間があれば必ず運動着に着替えて生徒とともにグラウンドを走り、忙しい時は必ず指示を与えて練習させていました。大きな声と明確な目標で生徒たちを引っ張っていました。私はS先生のこうした逞しい実践力と指導力に心の底から魅せられ、農業という教科にも大きな魅力と可能性を感じていました。

「良い牛を育てるには、牛を好きになることだ」がS先生の口癖であり、「最高の牛を育てて見せなければ教育にはならない」とも言っていました。そして牛のお産には例え昼であっても夜であっても必ず生徒たちを立ち会わせました。畜産専攻の生徒たちにはいざ

という時のために子牛を引っ張る準備をさせ、それ以外の生徒たちには静かに見学をさせました。

私も何度か立ち会いましたが、母牛が産みの苦しみを迎え、やがて苦しそうな唸り声を発し始めると、生徒たちからは誰かとなぐ「頑張れ」、「頑張れ」の声がかかってきます。そうして何時間かが経過し、やがて子牛の鼻先が見えはじめる頃には、生徒たちの「頑張れ」の声もさらに真剣みを帯び、母牛の力みに合わせて合唱のようになっていました。そしてついに子牛の全身が現れた瞬間、見守る生徒たちからは拍手と歓声が湧き上がり、「良かった」、「良かった」の大合唱で誰もが喜びあい、目を潤ませていました。

日ごろ、ツツパリだった生徒も、落ち込んでいた生徒も、我儘だった生徒も、誰もが深い感動の中にいました。言葉で表現するのが困難な程、感動的で素晴らしい教育がそこにはありました。こうした原体験が私の教育観を決定付ける大きなインパクトとなり、以後、私の基本理念は「良い生徒を育てるには、生徒を好きになること」となりました。

改めてお世話になりました多くの先生方に感謝いたしますとともに、我々農業教育に携わる者は、「教材」が命を持つ「生き物」であることを忘れてはならないと思っています。

時には教材そのものが、「生き物」としての「命」の営みを通して教えてくれるものがあります。そして、この「命」が教えてくれる教育こそ、経営論や技術論とは別の次元にある農業教育のもう一つの大きな魅力であり大切な教育であると思っています。

是非とも多くの先生方に素晴らしい教材を育てて頂き、教材である「命」が教えてくれる教育を大いに推進して頂ければありがたいと思います。心から期待して筆をおきます。

元 栃木県立宇都宮白楊高等学校 柴田 富男